

田村俊子と中国語雑誌『女声』

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻
北九州市八幡西区自由ヶ丘一・二（〒八〇七―八五八六）
（二〇二〇年十月三十日受付、二〇二〇年十二月七日受理）

はじめに

ジェンダーという概念は文学・文化研究の中に組み込まれ、ジェンダー以外のさまざまな問題との関係性をふまえたジェンダー意識が、現在では複合的に機能する様にとらえられるようになった。女性作家の〈女性〉という記号も、文化的なカテゴリーとして文学表現で機能している。女性作家の草分けである田村俊子（一八八四年四月二五日～一九四五年四月一六日）は一九三八年十二月に上海に渡り、一九四二年五月一五日、中国語雑誌『女声』を主宰創刊した。俊子客死後の一九四五年七月一五日まで合計三八号発行された『女声』の言語空間には、多くの日本人文学者および中国人文学者が組み込まれている。

中国人女性作家張愛玲は太平洋戦争勃発のため、香港陥落後の一九四二年、上海に戻り旺盛な文学活動を展開した。同時期上海で発行されていた邦字紙『大陸新報』には俊子と久保田万次郎の対談が掲載され、張愛玲の作品「爐余録」が日本人室伏クララの翻訳で掲載されている。緊迫した国際情勢を背景に展開した言語行為をさぐり、戦時上海の言語空間を中心に、田村俊子と中国語雑誌『女声』をめぐる言語行為について論究する。

田村俊子は本名佐藤とし、別筆名に佐藤露英、佐藤俊子などがある。東京府東京市浅草区蔵前町（現在の東京都台東区蔵前）に生れ、東京府立第一高等女学校卒業、日本女子大学校国文科を中退している。代表作には『木乃伊の口紅』、『炮烙の刑』などがあり、官能的な退廃美の世界を描き、人気を得た。代々続く札差だったという米穀商の家に生まれ、作家を志し、幸田露伴の門下に入る。一九〇二年に露伴から与えられた露英の名で、小説『露分衣』

を発表するが、その後露伴から離れ、岡本綺堂らの文士劇に参加したことをきっかけに女優になる。だが文学への意欲は失われず、一九〇九年に事実婚した田村松魚の勧めで書いた『あきらめ』が、一九一一年大阪朝日新聞懸賞小説一等になり賞金一千元を得た。この作品は、同紙に同年一月から三月まで連載された。その後、『青鞥』、『中央公論』、『新潮』に次々と小説を発表し人気作家となる。一九一三年一月「遊女」（後改題して「女作者」）を『新潮』に発表、四月『木乃伊の口紅』を『中央公論』に発表する。これより田村俊子の筆名を使用する。一九一四年四月『炮烙の刑』を『中央公論』に発表、女性作家の第一人者として文壇に全盛を誇る。しかし、一九一八年に朝日新聞記者鈴木悦の後を追ひ、松魚と別れバンクーバーへ移住、悦とともに現地の邦字紙『大陸日報』の編集に参画する。

一、上海と田村俊子

一九三六年、悦の死去により一八年ぶりに帰国して日本で小説家としての活動を再開したが、かつての筆力はなく佐多稲子の夫である窪川鶴次郎との情事が発覚する。その経験を基に書いた小説『山道』を発表後、日本を離れ上海に渡り、中国語婦人雑誌『女声』を主宰することになった。一九四五年四月一三日、友人の中国人作家陶晶孫の家から人力車で帰宅途中に昏倒し、搬送された上海の病院で四月一六日、脳出血により客死した。享年六二歳であった。墓所は鎌倉の東慶寺にある。没後、田村俊子賞が創設された。

中国語雑誌『女声』は大平出版印刷会社の編集室をかり、陸軍報道部の配慮で用紙を融通されて発行することになる。俊子は中国服を身につけ、中国

名の左俊芝として中国文化に根ざした、女性のための月刊誌を発行した。俊子の中国人および中国文化に対する愛情は『女声』という中国語雑誌の隅々まで浸透している。戦時上海で、中国人女性のために日本人女性を取り組んだ女性表象をめぐる言語行為の意味について考察する。さらに、『女声』をめぐる言語空間に引きつけられた日中のさまざまな文学表現者の言語行為の実体がいかなるものであったかについて考究する。

二、中国語雑誌『女声』

中国語雑誌『女声』は大平出版印刷会社の編集室をかり、陸軍報道部の配慮で用紙を融通されて発行することになる。戦時上海で中国人女性のために日本人女性を取り組んだ女性表象をめぐる言語行為の意味は深い。そこには、『女声』という雑誌をめぐる言語空間に引きつけられた日中のさまざまな文学表現者の言語行為の実体がある。

俊子の『女声』が創刊された一九四二年に草野は一時日本に帰国している。一月に「第一回大東亜文学者会議」が東京で開催されることになり、草野は中華民国を代表として来日した。東洋の民族が一致団結して大東亜戦争を勝ち抜くための大東亜精神の樹立およびその強化普及が大会の目的であった。理想を高く掲げたこの大会は表向き大成功であった。第二回大会は一九四三年八月東京で、第三回大会は一九四四年一月南京で開催された。第四回は新京に内定していたが、日本の敗戦が報じられ、草野は家族とともに南京日僑集中營に収容された。

上海で発行された邦字紙『大陸新報』における張愛玲作品の日本語訳による言語行為と俊子が発行した中国語雑誌『女声』における中国語訳による言語行為とを比較し、ジェンダーの視点から日中戦争下の文学的女性表象を考察する。

たとえば、中国語雑誌『女声』に掲載された宮沢賢治「注文の多い料理店」は、当時の日本占領下の上海という文脈で読めば、二人の猟師は明らかに日本軍のメタファーとして浮かび上がってくるというように、翻訳という言語行為は、外国語というフィルターによって時代、社会、歴史を組み替えることができる。雑誌主宰者である俊子のねらいは、外国語というフィルターに

よって言語空間すなわち作品世界を書き換えることに最後の文学的情熱を注いでいたのではないか。

ジェンダーによる言語行為という視点から、『大陸新報』（一九四四年二月一日）に連載した俊子の「日華の演劇に就いて」（久保田万太郎との対談）や同年六月二〇日掲載した若江得行のエッセー「愛愛玲記」は重要である。俊子という女性作家が放った、時代に抗う表現者のメッセージを、ジェンダー・文学・メディアという視点から考えることで、不明な部分が多い近代東アジアにおける女性表象を解明することができる。日中文化交流において、ジェンダー表象を日本語ではなく中国語で発信しようとした俊子の目論見は成功した。

俊子主宰『女声』と大東亜文学者大会とのつながりから、『女声』の言語空間が占める複雑な背景が浮かび上がってくる。大東亜文学者大会に郭沫若、老舍、林語堂といった中国大物作家の参加は実現できなかったことが、戦時下の日中関係の難しさを語っている。『女声』には共産党地下工作員である関露をはじめ、丁景唐が率いた上海地下工作員や進歩青年も参画し、周作人や柳雨生といった中国人作家の寄稿もあった。日本人作家俊子の主宰する中国語雑誌『女声』には不思議な吸引力が働いていた。

上海での邦字紙『大陸新報』文芸欄に掲載された張愛玲の言語行為、日本語訳を担った室伏クララという女性の言語行為および俊子主宰の中国語雑誌『女声』文芸欄に寄せられたさまざまな日本人作家の言語行為、中国語訳を担った陳緑妮の言語行為は、戦時下の上海という特殊な場所と時代背景に彩られて万華鏡のようにさまざまな女性表象を生み出した。陳緑妮訳の宮沢賢治「注文の多い料理店」、豊島与志雄「銀の笛と金の毛皮」、「うどんと石」「太一の靴は世界一」、「象のワンヤン」、武者小路実篤「愛と死」、火野葦平「怪談宋公館」についてなど、日本語が中国語に翻訳される文化的フィルターは重要である。

『田村俊子』を上梓した瀬戸内晴美は、俊子には中国文化協会の武田泰淳や堀田善衛をはじめ、上海に渡っていた阿部知二や石上玄一郎などとの交流があったことを指摘している。なかでも武田泰淳は『女声』で中国語訳を担っていた陳緑妮をモデルとした人物を作品に登場させるなど日本人作家の

作品が中国語雑誌『女声』をめぐって複雑に関係していたことがわかる。

田村俊子は死の直前まで白粉をつけていたという。日本、カナダ、アメリカ、中国とまさに世界を舞台に女性を演じきつた一生であったともいえる。女性の肉体の解放だけではなく、女性の精神の解放を望み、女性の声をひろく世界にアピールできたことは、女性作家という枠組みを遙かに超えて多くの人たちに記憶されている。

三、田村俊子と言語行為

オースティンは、言語とともに発語者は行為を行っているという考えから言語行為について次のように指摘している¹⁾。

発語行為とは、大よそ、一定の意味 (sense) と言及対象とを伴って一定の文を発することに等しく、また、この両者は、大よそ、伝統的な意味における意味 (meaning) に等しいものであった。第二に、このとき同時にわれわれは、情報伝達、命令、警告、受領等の発語内行為、すなわち、一定の (慣習的な) 発言の力をもつ発語を遂行しているのであるということも述べた。第三に、このときわれわれは、同時にまた発語媒介行為をも遂行するのである。すなわち、何かを言うことによって、説得、勧誘、阻害、さらには、驚かせたり誤らせたりすることなどを惹き起し、なし遂げることである。

オースティンは、言語は行為であり、読者が解釈によつて物語を生み出すという言語媒介行為について述べている。自然行為のことばと違って、文学のことばは読み手が語り手の視座を明らかにすることによつて、ジェンダー問題を顕現化することができる。飯田祐子氏は「女性作家の自己表象から浮かび上がってくるのは、自己を指示対象として表象する行為でありながら、指示対象となつている自己に向かうのではなく、読み手という他者に向かうという自己表象行為のあり様である²⁾」と指摘している。俊子によつて開かれた女性の性の表現は、行為として読者の女性の性への開眼に向けて働きかけていたのである。

上海で発行された邦字紙『大陸新報』における張愛玲作品の日本語訳による言語行為と俊子が発行した中国語雑誌『女声』における中国語訳による言語行為とを比較し、ジェンダーの視点から日中戦争下の文学的女性表象については言語行為という視点から解き明かすことができる。

また、戦時上海の邦字紙『大陸新報』(一九四六年六月二〇日)に掲載された張愛玲に関するエッセーを書いた上海東亜同文書院英文学教授若江得行について考察する。俊子が主宰した中国語による月刊雑誌『女声』(計四巻各巻一二期、欠号も含め総三八号)を所蔵する上海図書館における綿密な調査により、『女声』文芸欄に掲載された言語空間を総合的に研究することができる。豊島与志雄、武者小路実篤、火野葦平、宮沢賢治の作品を詳細に調査することによつて、『女声』に関わる日中のさまざまな文学者の言説をめぐる言語行為を解明することができる。中国語雑誌『女声』の編集者関露、中国語翻訳者陳緑妮、邦字紙『大陸新報』の日本語翻訳者室伏クララといった日中の女性表現者が、他国の言語と格闘した翻訳というフィルターを考察することで相互の女性表象をめぐって試行錯誤した言語空間を浮かび上げることができることは可能である。

ジェンダーが複合的に機能する状態について考察する。日本で初めて、女性の覚醒を宣言した雑誌『青鞥』で「和製ノラ」と呼ばれた女性たちの放つたメッセージを現代に生きる女性たちの直面する問題と結びつけ、一世紀前の日本社会における女性作家の言語行為について考察することが重要である。明治期を代表する樋口一葉、大正期を代表する与謝野晶子と田村俊子といった女性作家の言語空間から文学的女性表象による言語行為という視点が活性化される。

おわりに

戦時上海には日本人が一〇万人居留し、邦字紙『大陸新報』(一九三九年一月一日〜一九四五年九月一〇日)が刊行されていた。『大陸新報』とは、対日協力政権であった中華民国維新政府下にあった上海で、大陸新報社から刊行された日刊新聞で、一九四〇年三月末に成立した汪精衛政権下で発行は継続され、終戦後まで続いた。当時の日中両国文化の交流状況を考える

とき華中を中心とした日本軍占領下の中国の政治、経済、時事、さらには文学・文化・芸術の動向、社会事情などを知る上での資料として重要である。一九四三年二月に『上海毎日新聞』も併合され、『大陸新報』は「中支唯一の国策新聞」となった。同紙には、張愛玲「香港―焼け跡の街」（室伏クララ訳）が連載されている。中国人女性作家張愛玲が上海の日本人間で相当数の愛読者を得ていたことがわかる。戦後『赤地の恋』（柏謙作訳『赤い恋』一九五五年）と『秧歌』（並河亮訳『農民音楽隊』一九五六年）が紹介されているほかは翻訳がなかったが、近年になって、張愛玲研究は日中で活況を呈している。『大陸新報』（一九四四年六月二〇日）には上海東亜同文書院の英文学者若江得行のエッセー「愛愛玲記」が掲載された。邦字紙ではあるが、戦時上海の言語空間を如実に浮かび上がらせた画期的な紙面となっている。

阿部知二が「花影」（『文学界』一九四九年六月）という戦時上海の交友を追想した作品に「年老いた日本の女流作家」「もう十年も前から北京上海にすまっつてゐる孤独な人」と描いたのは『あきらめ』『木乃伊の口紅』などで知られた、田村松魚と離婚後の佐藤俊子である。俊子は一九四四年の南京での第三回大東亜文学者会に阿部と共に上海から参加した。俊子は、中央公論社の特派員として一九三八年一二月に中国に来ていた。一〜二ヶ月の滞在予定であったが、日本文壇を窮屈に感じていた俊子は、そのままずると北京での生活を続ける。南京国民政府の顧問だった草野心平は、中国人女性のために文化的雑誌の刊行を考えていた俊子に大平出版印刷公司の名取洋之助を紹介するのである。

また、中華人民共和国体制下の中国大陸では、張愛玲は一九五二年以来禁書の扱いを受けてきたが、一九八五年に中国作家協会上海支部機関誌『收穫』が「戦場の恋」を掲載し、これと前後して淪陥期上海で中共地下黨員であり、文芸誌『万象』編集長の柯霊が、当時を回想するエッセー「遙か張愛玲に寄せて」を発表以来『伝奇』『流言』が復刻された。張愛玲リバイバルの年が、中国文明ひいては中共独裁制にラディカルな疑問を突きつけた鄭義、莫言らの中国文学勃興の年と一致している点も興味深い。一九四〇年前後の戦時上海で、日本の女性作家俊子と中国の女性作家張愛玲は、ともに女性表象をめぐってペンによる闘いを挑んでいたのである。

戦時の日中文化交流において、ジェンダー表象を母語である日本語ではなく中国語で発信しようとした俊子の目論見は成功した。戦時上海における文化接触史を視野にいれながら、日中における女性表象を地域・メディア・制度からジェンダー表象を通して究明する視点が大切である。俊子の中国での足跡の調査のため南京図書館・北京国家図書館での調査と上海図書館が所蔵する『女声』を中心とした複雑に絡み合った戦時上海の言語空間を緻密な現地調査によって解明することができる。さまざまな切り口から、激動の戦時上海と深く切り結んだ俊子を中心とした日中の作家の言説を丁寧読み解くことで、日中戦中・戦後にかけて俊子が実現しようとした「乃婦女呼聲」「爲婦女而聲」「由婦女發聲」による社会性および思想性の真価は明らかになる。

註

1 『J』オースティン、坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、一九七八年、一八六頁。

2 飯田祐子「女」の自己表象―田村俊子「女作者」『彼女たちの文学』名古屋大学出版会、二〇一六年、三六頁。

参考文献

- 『田村俊子作品集』第1巻〜第3巻オリジン出版センター一九八七年
『田村俊子全集』第1巻〜第9巻ゆまに書房二〇一七年
井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ジェンダーの社会学』岩波書店一九九五年
河合隼雄『河合隼雄著作集10 日本社会とジェンダー』岩波書店一九九四年
伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社二〇一五年
水木光美『ジェンダーから見た日本語教科書』大学教育出版二〇一五年
中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社二〇一〇年
ジョン・P. サール、山田友幸監訳『表現と意味』誠信書房二〇〇六年
『P』サール、坂本百大・土屋俊訳『言語行為』勁草書房一九八六年
『J』オースティン、坂本百大訳『言語と行為』大修館書店一九七八年
S. フェルマン、立川健二訳『語る身体スキヤンダル』勁草書房一九九一年

小林康夫・石光康夫編 『文學の言語行為論』 未来社一九九七年

**A study on Toshiko Tamura and Chinese magazine
"Female Voice"**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human Development,

Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

No English abstract